

ローマ人への手紙 第5章 3~5節

「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることはありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

このところ春を呼ぶ強風が吹きわたる。窓辺に音を響かせ、木立を揺さぶる。飛び鳥を煽り、飛行を惑わせる。東北地方では止むことを知らないかのように雪が降り続けている。風雪が道行く人を包み影のようにしている。それでも、この強風が吹く度に春の近さを数えられる。厳しい風圧、風雪に向かいながら春の訪れを待つ。険しい風の中、春を楽しみに待つ。待つ春がそこにあるから忍耐が生まれる。春に備えるところが生まれる。このところに春を呼ぶのではなく、待つ望みが湧く。なぜなら、今日この身で強風の音を聞き、強風のなかに立ち、風を感じているからである。

厳しさのなかでありながら喜びを体験する。厳しさのなかで忍耐が生まれる。厳しさのなかで品性が整えられる。厳しさのなかで希望が湧き上がってくる。厳しさのなかで主なる神の風、聖霊が私たちのうちに吹き込む。この聖なる風こそ神ご自身であり、その御愛の風である。この風は吹き止むことはない。私たちの心に注がれている。

2022年2月24日